

第6回 JLPP 翻訳コンクール 英語部門講評

翻訳家、日本文学研究者、
カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授
マイケル・エメリック

JLPP翻訳コンクールの審査委員会に参加させていただくのを、毎年楽しみにしているのですが、コロナ禍によって世界が一変してから二度目の審査にあたる今回は、特に意義深いものでした。翻訳対象となった作品、鹿島田真希氏の「波打ち際まで」と向田邦子の「お辞儀」はどちらも「翻訳されるのをずっと待っていた」といわんばかりの、独特な雰囲気のあるいい文章だということも関係しているのですが、それだけではありません。今年の応募作品を読みながら、世界中のいろいろな街で、コロナ禍で自由に外に出られない翻訳者たちが、みな同じふたつの日本語の文章に真摯に向き合い、心を込めてそれを英語に「書き直す」作業に取り組んでいる様子を感じられ、それに胸を打たれました。翻訳、あるいは文学を読むというのは、ある意味孤独な楽しみなのですが、深いところでは、コロナ禍が作り上げてしまった隔離の世界にあっても他人に向けて手を差し出そうとする、きわめてソーシャルな行為でもある、と改めて感じさせられました。

今年の応募者のなかには、対象となった作品の、普通に読んでいたら気づかないような細部にユニークな解釈を示し、あるいは独創的な方法で原文の意味合いを捉えた人も多かったように思います。全体のレベルがとても高い、と感心しました。その中でも、最優秀賞に選ばれた Grant Jason Lloyd 氏、優秀賞に選ばれた Adam Sutherland 氏と Adam Kuplowsky 氏が手がけた英訳作品はどれも独特の味わいがあり、英語の文章としてとても生き生きとしておりました。作品に対し想像力を働かせ、深く、丁寧に解釈していることが、随所に感じられました。

向田邦子の「お辞儀」には「親のお辞儀を見るのは複雑なものである」という非常にシンプルな文があります。Llyod 氏はこれを “It’s a strange thing to see your parents bow” と訳しているのですが、「複雑なもの」を “a strange thing” にしているのをみて一瞬、不思議に思い、そして次の瞬間、これはやはりいい訳だな、と感心させられました。あえて逐語訳を避けることで控えめな、心に残る一文になっております。Kuplowsky 氏の訳は “It’s a complicated thing, seeing one’s parents bow” で、Sutherland 氏のは “It’s a complicated old thing, seeing your parents bow” となっています。両者とも、逐語訳的な方法を選びながら、細部では訳者独自の感性を働かせ、Llyod 氏のものに比べて少し軽い口調で、さらっと読める訳文になっている、と私は感じました。こんなにもシンプルな日本語の一文にも、たくさんの「いい訳」の可能性があると、思わされました。

Grant Jason Llyod 氏、Adam Sutherland 氏、Adam Kuplowsky 氏、本年度の翻訳コンクールのご受賞、おめでとうございます。受賞には至らなかった多くの応募者、力を込めた、いい訳文を読ませてくださり、ありがとうございました。これからも翻訳の腕を磨きながら、ご活躍を続けていくことを心から願っております。